

住民パワーで誕生！

NEWSな済生人 Interview

大分・日田病院が目指すもの

済生会日田病院は1990年10月、大分県の二次医療圏で唯一、公的病院がなかった西部医療圏に20年の歳月を経て開院しました。それは「地域の中核を担う病院の設置を!」と望む住民の声に応えたものです。済生会は医療・福祉を通じて誰一人取り残さない社会を目指し、今年

7月、拠点のない7県（青森・秋田・山梨・岐阜・徳島・高知・沖縄）にも支部・施設を開設しようとする、来年度から10年の長期事業方針をまとめました。日田病院院長の林田良三さんに地域に求められる病院のあるべき姿を伺いました。（日田病院 済生記者 石井 玲）

石井 私は今年度、済生記者に委嘱されました。改めて日田病院を調べていたら、当院は住民の要望で開院したことを知りました。

林田 日田玖珠^{くす}広域市町村圏の振興計画で公的病院の設置を計画したのが1970年、そして、当院がオープンしたのはそれから20年後の90年です。

石井 開設まで20年も？

林田 済生会、地元医師会、日田市との

協議が続く中で、85年12月に3000人を超える市民による済生会病院の早期実現を期待する決起集会が市民会館で開られました。救急や小児医療を担う病院の開設を期待し、青年会議所や婦人会など住民パワーが源となって当院が開院しました。

〈大分〉日田病院 院長

林田良三さん

地域に必要な情報は院内外に開示する!!



徳川幕府の直轄地・天領として栄えた豆田町



巡回診療には研修医も参加

石井 そんなことがあったんですね。それだけに地域との関わりは重要ですね。

林田 その通りです。開設までの20年は、紆余曲折がありました。地域医療構想などが進む昨今、地元医師会とは機能・役割をすみ分け、情報を共有して連携し、共に地域医療を守ろうと一致しています。

石井 市民との関係づくりはどうですか？

林田 当院の役割を知ってもらおうと「なでしこ」という住民向け広報誌を作成し、院内や、へき地巡回診療の際に配布しています。コロナと地域医療、SDGsと済生会など紹介してきましたが、もともと地域住民の方々に当院を知っていただくよう

に、幅広く補填してきました。ここでは公的病院は当院だけですから、へき地医療拠点病院も災害拠点病院も地域医療支援病院も地域がん診療連携拠点病院も第二種感染症指定医療機関も一手に引き受けています。

石井 健康相談や健診を行なっています。

石井 商工会議所にも働きかけていますね。

林田 当院は地域がん診療拠点病院なので、働きながらがん治療を続ける患者さんのことを理解、支援していただけるよう商工会議所で講演しました。最近では市議会議員や記者クラブに、医師の働き方改革の目的や概要、地域医療への影響の話をしました。

石井 記者クラブですか？

林田 記者のみなさんに話をして、記事にしてもらうことで、住民に医師の働き方

改革を知っていただけます。住民の理解と同意が医師の働き方改革達成のためには大切だと考えています。また、がんや人生の最期をどう過ごすか考えるアドバンス・ケア・プランニングの市民公開講座を開催、地元ケーブルテレビで放映してもらいました。

石井 林田先生も出演していましたね。

林田 はい。市長や医師会会長と出演しました。市民と地域のための病院ですから、院長がどんな考えを持っているのか、日田病院はどんな病院なのかを、テレビを通じて広く知ってもらうのも大切です。

住民の命だけでなく暮らしを守る

石井 林田先生が考える当院の特徴は？

林田 地域に不足する医療機能を積極的

に、幅広く補填してきました。ここでは公的病院は当院だけですから、へき地医療拠点病院も災害拠点病院も地域医療支援病院も地域がん診療連携拠点病院も第二種感染症指定医療機関も一手に引き受けています。

石井 刑余者の支援もしていますね。

林田 県から受託している大分県地域生活定着支援センターで、高齢や障害のある刑余者に福祉的なサポートをしています。更生保護施設あけぼの寮へも、当院から社会福祉施設指導員2人を常駐で派遣していますが、これは更生保護施設と済生会の双方において全国唯一の取り組みです。いずれも大分市内での活動です。

石井 あけぼの寮ではなにを？

林田 寮で暮らす人は、高齢や病気などで健康不安を抱える人が少なくありません。まずは健康保険証の取得をサポートします。保険証があれば医療が受けられ、身分証明書にもなります。これを手掛かりに、社会復帰を後押しします。これまでに約3000人を支援してきました。地域生活定着支援センターも、当初の5人から現在は8人体制に強化、刑務所に入る前から関わり始める「入口支援」を強化しています。

石井 医療も福祉も、日田でも大分市でも、本当にいろんな役割を担っているんですね。

林田 この規模の病院としては身の丈以上のことをやっていると感じています。しかし、医師も病院の運営資金も不足しています。非常勤医師の活用でかろうじて機能を維持していますが、なんとか踏ん張って

※新型コロナウイルス感染防止のため、当分の間、インタビューは当該施設の済生記者が務めます。また、写真撮影時のみマスクを外しています



インタビューの石井さん（左）と林田院長

いるのが実情です。

石井 何か良い方法はないのでしょうか。

林田 補助金をいただける事業もありますが、それだけではとてもカバーしきれません。お金がないからやめますとは言えないので、公的資金の投入や外部の協力も不可欠です。そこで当院の公益性を理解をいただいている医師会長や地元の私立学校理事長に、日田市長への公的病院等に対する特別交付税措置の陳情に同行してもらうなど、共同歩調で取り組んでいます。また、7月

には日田市議会議員と当院の経営状況や今後の福祉活動についての意見交換会を行ない、当院への公的資金導入の妥当性について理解を得ました。

石井 味方がいるのは心強いですね。

林田 そうですね。また、地域の先生方との連携を強化するために「ロ・コン」というインターネット上のデータリンクサービスを活用し、当院の診療情報をオープンにしています。現在は一方通行のシステムですが、ゆくゆくは、地域の医療機関同士で診療情報を共有できる形にしていければと考えています。

職員一丸の第一歩は 情報開示

石井 地域の期待に応え、こ



健康相談は病院と住民をつなぐ大切な架け橋

れだけ幅広い役割を担い続けられる秘けつは？

林田 石井さんはどう思いますか？

石井 ええと……林田先生は私たち職員の一体感を大事にしていますよね。

林田 そうですね。組織の土台は職員で、多くの職種が働く病院では、特にチームワークが大切です。そこで院長就任後に創刊した、季刊の院内報「TEAM済生」やグループウェアを通じ、全職員に病院の現状と方向性、理念や役割などを繰り返し発信してきました。済生会の役割として生活困窮者を支援する、公的病院として地域社会に貢献する、社会福祉法人として刑余者支援などを行なう——と。

石井 経営状況のデータも交えた具体的な院長メッセージは、わかりやすいです。

林田 そこが大切です。経営実態も何もかも、包み隠さず見せて理解してもらう。私たちの現在地点はここで、日田病院の役割はこういうこと、それを果たすためここに向かってこうしていきましょう。みな同じ方向に向かって一丸で頑張ろう、そんなメッセージです。

石井 新しい取り組みを始める際、林田先生は現場でも説明してくれますよね。

林田 高齢化への対応で病床機能を細分化し、回復期リハビリテーション病棟や地域包括ケア病棟、緩和ケア病棟などを順次整備してきました。「なぜ、いまこうするのか」を担当部署に向いて説明します。いまでも訪問診療・訪問看護などの在宅部門を充実させるために委員会を立ち上げ、ステーション化できないか検討中です。

石井 林田先生はフットワークが軽いです。

林田 いつでも動けるように、足元はいつもスニーカーですよ（笑）。それでも病院を動かす原動力は職員一人ひとりのパワーなので、とにかくみなさんにしっかりと向き合うことを重視しています。

石井 はい。

林田 そして地域の期待に応えるためには、職員がいきいきと働ける病院づくりが大切です。アンケートで職員満足度を把握し改善につなげていて、職員の頑張りをしっかりと評価する人事考課制度の見直しも進行中です。

救急・災害対応・がん診療・
へき地診療・そして福祉も。
地域に不可欠な役割を広く担う

NEWSな済生人 Interview



災害医療の強化を図る訓練。関係機関との連携は欠かせない

石井 私たちも頑張りがいがあります。

林田 職員と触れ合つと、ヒントやアイデアをもらえます。訪問看護師や相談員は、まちに出ていろんな人と交流し、情報を持ち帰ってくる。それは「地域のためにどうすればいいの」を教えてくれる宝物です。地域の団体や企業など顔見知りの関係をさらに広げて、住民パワーを生かしたまちづくりに貢献できたらと考えています。

石井 たとえばどんなことを？

林田 地域に潜在している貧困や格差問題を考えると子ども食堂や独居高齢者の支援など、日田でも社会福祉事業ができたらいいなと思っています。住民・行政・団体・企業、そして日田病院の職員のみなさんの理解・共感を得ながら、地域の思いに込められる病院であり続けたいです。

【取材を終えて】

林田院長は職員に対し、院内広報誌等やグループウェアを通じて、当院の現状や院長の思いをわかりやすくスピーディーに伝えてくれます。当院が地域の中核病院として、これからの住民の期待に応えるために、私も職員の一員として努力していこうと思えた取材でした。

(石井 玲)

日田病院初代院長 小金丸道彦さん

新病院の始動、大事なのは 地元との信頼関係

「公的病院を建ててほしい!」。1990年8月、20年にわたり住民が切望した日田病院は竣工しました。筆者は1988年8月、大分支部の常務理事に就いて、その2年後に初代院長に就任しました。

日田病院は1990年10月、職員111人・8診療科・200床の共同利型病院として開院。救急告示病院へき地中核病院の指定を受け、筆者



は無医地区を回る巡回診療所長としても活動しました。外来を終え食事を流し込み、看護師・事務員と午後1時に日田病院を出発。よく居

眠りするドライバーに代わり自分が運転したこともありました。出発時間間に合わなかった時はバイクに乗って追いかけますが、途中、子牛ほどのイノシシが突然道を横切ったこともありました。帰路、職員と味わったわさびソフクリームは忘れられません。

救急病院に必須の診療科を誘致する際、大学医局や地元医師会との交渉は院長である筆者に任されていました。日田は盆地です。夏は酷暑で冬は極寒。雪がちらつく中、夜遅くまで交渉しました。

地元の方からは「ぬしはどこもんか?」「あゝよそもんか」と言われたこともありますが、信頼関係を築くと情が深い。地元企業の社長、住職、婦人会など異業種との付き合いは2002年の院長退任までお世話になりました。

日田病院は地域に育ててもらった病院です。職員一人ひとりがこれからも地域に溶け込んで愛される済生会であってほしいと願っております。

(現・福岡・介護老人保健施設

大牟田ライフケア院 施設長)